

書 評

Mark Twain : God's Fool by Hamlin Hill

(New York : Harper & Row, 1973, 308 pp.)

那 須 頼 雅

Mark Twain に関する研究書は、年々その数を増し、充実へと向う傾向を示すなかで、ここにまた一読に値する良書が加った。それは Stanford 大学教授 Hamlin Hill の著わした *Mark Twain : God's Fool* である。従来なされたこの種の伝記的研究、とりわけ、晩年の Twain を扱うものはもっぱら、Albert Bigelow Paine の大著 *Mark Twain : A Biography* に基づかざるをえなかった。なぜなら、Paine は、Twain との関係が異常に深く、その親交の度合い、期間において、他の研究家の比ではなかった。とりわけ、1906年以降は、Twain にとって Paine は単なる訪問者という域を越え、ほとんど Twain 家の一員となった。Paine は毎日欠かさず Twain の家を訪れ、この作家と直かに接触する機会を得た。1912年に Paine が公けにした先の大著は、この期間に彼が懸命に集めたものの結実である。それは、彼がこの恵まれた地位を存分に利用し、この期間だけでなく、それ以前のものをも含む、Mark Twain 伝記資料のほとんど全部を手中におさめての成果であった。ところが、最近になり、この完璧と思われてきた Paine の大著 *Mark Twain : A Biography* に、重大な欠落部分があることが次第に明確になってきた。この注目すべき事実は、先に Henry N. Smith、次いでは Frederick Anderson が主幹する California (Berkeley) 大学の Mark Twain Papers に基づく研究成果によって明らかにされた。その後も、この Mark Twain Papers に拠る輝かしい業績がつぎつぎに著わされている。この Hill

教授の *Mark Twain : God's Fool* もその一つにはかならないが、とくにこの書がここで書評の対象に選ばれる理由は、Paine によって故意に削除、抹殺された人物 Isabel Lyon に着目し、彼女の貴重な日記が公開されているからである。

Lyon は、1902年11月から1909年3月まで、Twain の秘書を勤めるかたわら、邸の雑事一切を管理する家政婦で、さらには Twain の困難な事業処理にもたずさわった。Twain にとって彼女はまさに忠実で得がたい補助者であったのだが、後になって不幸にも彼女は、Paine、娘 Clara 等の憎しみ、嫉妬にあい、ついに、裏切り、背任の疑いで突如解雇される憂目をみた。始めのうち、Twain は彼女に特別の寵愛を注いだ。彼女を紹介してくれた Mrs. Whitmore に宛てて、Twain は丁重に感謝の辞を重ねてのち、“She is really a treasure and enormous comfort.” と書いていることでも明らかである。ところが、それから8年後に Twain が、娘 Clara に宛てた手紙では、この女秘書への甘い言葉とはうってかわり、聞くにたえないほどに口汚く、彼女のことを罵り、“a liar, a forger, a thief, a hypocrite, a drunkard, a sneak, a hambug, a traitor, a conspirator, a filthy-minded and salacious slut pining for seduction and always getting disappointed, poor child” とまで書いている。これほどまでに、Twain を激昂させ、激怒させ、彼女への態度を一変させた原因は一体何であろうかと、だれしも好奇心を異常にそそられるであろう。この Hill 教授の新書は、このアメリカの生んだ文壇の巨匠の、今迄隠されつづけた面を実に冷静な筆さばきで描く。この著者の眼は、Twain と Miss Lyon とに等しく注がれ、丁寧に、興味深く書き進められていて、さすがと驚嘆させる箇所が幾つかある。

しかし、こういった Twain と Miss Lyon との人間関係以上に重要と思われるのは、言うまでもなく Twain の後期作品に与えた Miss Lyon の影響である。この書によれば、Twain は作品を新しく書きあげると、きまったように周囲の者を集めてそれを朗読し、その反応をたしかめ、修正を施すことに

していたというが、妻 Olivia という有力な「検閲者」(censor) が病にたおれ、彼の側から居なくなると、Lyon と Paine とがもっぱら、この役をひきうけた。とりわけ、Lyon は、Twain の作品に少なからぬ影響を与えたという。たとえば、“Czar’s Soliloquy” (1905年3月、*North American Review* に掲載) の時も Colonel Harvey と共に Lyon はそれに心からの賛辞を惜しまなかったし、また、“King Leopold’s Soliloquy” を聞くとこの女秘書は深い感動に打たれたという。さらに、*What Is Man?* に眼を通すと彼女は、“He is so wonderful—so ennobling.” と激賞したというし、“War Prayer” が Twain によって朗読されると、うっとり聞きほれたともいう。このように、Lyon は、晩年の Twain の人と作品に深い造詣をもち、Paine 同様、この作家の“biographer”たる資格を十分にそなえながら、競争者たち、とりわけ Paine に完全にだし抜かれた。彼の方は先の大著を皮切りに、つぎつぎに Mark Twain 関係書を公けにして Twain の比類ない“biographer”として世にひろくその名を知られる存在となるのに比して、Lyon の名は、Twain 死後60年以上もたった今日やっと、Hill 教授の力によって日の目をみた。この余りにも大きな違いに、なにか不自然なものをだれしも感じるのだ。それも実はそのはずで、Paine は、当時の時流に即し、いわば“Genteel Tradition”を墨守する「紳士」であったのにひきかえ、Lyon の方は、形式を重んじ虚偽に固った俗物社会に反抗し、自らの情緒と感受性に信をおいて、自らが是とするところを臆せず口にし実行する「現代女性」であったという。当然にして、世間の二人に対する処遇は異なり、Paine は華かなデビューをとげるが、Lyon の方は省みられず、影の存在として埋められた。もしもかりに、Paine と Lyon とが、互いに相争うことをせず、Mark Twain の真実紹介に力をあわせていたとするならば、今一般に知られる“Mark Twain”とはかなりくい違った“別の Mark Twain”がわれわれの間に根を下ろしていたことであろう。

このように、この書は Paine 批判を主軸に書き進められているが、Clara

と Jean という Twain の二人の娘たちに対しても、実に冷やかである。Lyon の立場をもとにこの書が書かれたのであれば、それはむしろ当然のことかもしれない。Twain の囲りに、Mrs. Fairbank, 妻 Olivia, 娘 Clara, Jean という風に “Miss Watson” タイプの女検閲者たちがたむろし、本来の Twain を歪め、あの滔々とほとぼしる筆力を鈍らせ、Twain ならではの特色を減少させた。これら本来の Twain の存在を脅す女検閲者たちの眼には Twain は “永遠の child” に写ったが、これとは全く対照的にこの Lyon の眼には Twain は “King” と写った。そして真に女らしい心遣いをこの “King” に配ったという。彼女は日記にこう書いている。

“I know that the king must be kept calm, where I know how to do it. He mustn't be harassed, he mustn't have unnecessary matters brought to him to fret over; he must be saved in all ways that he has had enough of it in his life...”

このやさしさが Lyon にあったからこそ、一時、Twain は、自分の書簡集の編纂の仕事に当らせるものとして彼女を選び、“Lyon can do the work, and do it well.” と言ったものと思われる。というのは Twain は、妻 Olivia を筆頭にしたら女検閲者群が、彼の書いたものに容喙し、彼女らにとって “blasphemies and vindictiveness” とうけとられる箇所をすべて訂正し削除していることを知っていて、真に自分の文学に理解のある Lyon にその仕事を託したかったにちがいない。こうして、片や冷たい検閲者と、片ややさしい女秘書の間であって苦悩する Twain を、彼一流の用語におきかえて表現するならば、“God” と “Satan” の間で道を見失った文学者 Twain ということができよう。この意味合いにおいて、この表題 “Mark Twain : God's Fool” をみると、心憎いばかりに妙を得ていると言わざるをえない。

しかし、どんな研究書にも、長もあれば短もある。あえて一言書けば、この Hill 教授の書は余りに伝記的にすぎるといふ憾みがある。今われわれに残されて、しかも、最も重きをおかれるべきものは、Twain の文学作品で

あることは言うまでもない。この Hill 教授の並々ならぬ努力によって漸く発掘された価値ある資料も、それだけではあまり大きな意味をもたない。この資料に基づいての本格的な作品研究がなされてこそ、真の価値が生まれてくる。Hill 教授が近い機会に、そういった総合研究を手がけられることを切にのぞむものである。

(March 4, 1975)